

社会主義国化過程とソ連邦の国際関係(2)

金子利喜男

第2章 モンゴルの社会主義国化

はじめに

モンゴルの社会主義国化は、1917年のロシア社会主義革命とその余波から強烈な影響をうけて成功した。ソビエト国家にたいする帝国主義者の階級的敵意は、ロシア社会主義革命当初からあらわれていたのであるが、第1次世界大戦がおわるや、この敵意は、ソビエト共和国の内政に直接介入し、ブルジョア・地主体制を復活することを目的とした列強の武力干渉となってあらわれた。日本をふくむこの対ソ武力干渉は、モンゴルの社会主義国化過程をも妨害した。

ロシアでは、労働者と農民に立脚する革命側の赤軍が、地主・資本家側の白軍とたたかい、赤軍側がはるかに優勢になっていたが、白軍が帝国主義列強から援助を受けはじめると、国内戦は国際戦の様相をもおび、いちじるしく緊迫して長びいた。結局、反動勢力は、ロシア国民からだけでなく、世界のあちこちでも抵抗にあい、赤軍は、ふたたび圧倒的に優勢になり、白軍と帝国主義列強の干渉軍を撃退していったのである。

はやくから、または後ほど、追いつめられた白軍の一部は、モンゴルや他の場所に侵入し、モンゴルや満州などを基地としたので、モンゴルも革命過程の渦中のなかにまきこまれていった。日本軍は、つねに反革命側にたって赤軍やパルチザンに銃口をむけたが、革命の波に抗しきれず、シベリアから撤兵し、白軍の敗走兵たちも、ソビエト・ロシアとモンゴルの社会主義化の大潮流のなかでは孤島と化したのである。このような過程のなかで、1920年モンゴルの2つの革命グループは、単一の政治団体を結成し、翌年ついにモンゴル臨時人民政府が成立した。

1 革命前の情況

事実上の植民地

モンゴルの社会主義国化は、その内発的要因をとともな
いつつも、隣国ソビエト・ロシアのつよい影響下におこ
なわれた。すなわち、地政学的な要因がきわめてつよい。モンゴルは、17 世
紀に国家としての独立をうしない、200 年あまり 異民族の満州人の支配をう
け、その社会経済的發展が長いあいだ阻害されてきた。人民の解放運動は、
清朝政権の手で きびしく 弾圧されてきた。1911 年の中国の辛亥革命によっ
て清朝が打倒されると、ようやくモンゴル人民のまえにも独立闘争の有利な
情況がでてきたが、このような闘争を指導した封建領主たちは、封建的神政
国家をつくった。同国は、のちに中国と帝政ロシアの協定によって、宗主国
である中国の 1 部を構成する「外モンゴル自治国」として承認されたが、現
実には中国の封建領主と帝政ロシアの植民地的抑圧下におかれていた。圧倒
的多数の遊牧民^{アラト}は、外国の植民地主義者から容赦ない搾取をうけ、土着の世
俗的、宗教的封建領主に農奴として隷属していた。遊牧民の経済はおくれて
おり、モンゴルでは工場制工業は存在せず、自然経済が主だった。遊牧民
は、封建領主や農奴制国家にたいし、数おおくの金納と現物納の義務をお
い、返済不能の債務奴隷の状態にあった。ある中国人の高利貸会社は、貸付
金の償却と利息として、毎年 7 万頭の馬と 50 万頭の羊をモンゴルから連れ
さった。革命前の遊牧民の負債総額は、5,000 万金ルーブルに達し、そのう



モンゴルの革命ポスター：画家シャルバ作・1922年（世界史，現代2より）

えモンゴル人は、飢餓、文盲、悪疫の悪条件のもとで生活していた。ラマ僧は、権力と運命への従順をおしえ、全体としてみれば、搾取者側の体制維持に肯定的に作用していた（世界史，現代2，ソビエト科学アカデミー版，江口朴郎ほか監訳，東京図書株式会社発行所，1964年，549～551頁）。

**ロシア革命にたいする
モンゴルと列強の反応** 1917年のロシア社会主義革命の成功と社会主義的政策の推進は、全世界に大きな影響をあたえた。それは、たんに資本主義列強のみがうけたの

ではない。なぜなら、社会主義は、資本により搾取・抑圧されていた資本主義社会のひとびとだけでなく、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなどの植民地や半植民地、あるいは封建的、半封建的制度のもとで抑圧されていた諸民族をも多かれ少なかれ鼓舞したからである。社会主義は、じっさい民族解放運動にじつに巨大な形響をあたえてきた。現代は、資本とならんで労働も広範な国際性をもっており、それゆえ、たとえ所与の国家が封建的、半封建的であっても、そこで資本側より労働側・社会主義国側からの影響力が強大であるばあいには、モンゴルのように、一挙に社会主義国化することがありうる。

1917年のロシア社会主義革命後は、モンゴルの国内・国際関係は、ロシア革命の諸要素ときわめて明瞭に連動している。翌1918年のはじめ、ソビエト政権がザバイカル地方におよんでくるや、これにおびえたラマ教寺院の首長である活仏、すなわちボグド・ゲゲンは、いそいでロシア・モンゴル国境を閉鎖し、ソビエト人のモンゴル入国を禁止し、ロシアとの通商を停止して、イルクーツクで教育をうけていた1団のモンゴル青年を召還した（前掲，551頁）。

他方、帝国主義列強は、ソビエト政権を圧殺するため、ソビエト・ロシアにたいして武力干渉を開始し、シベリア方面には日、英、米、仏の連合国がウラジオストークから侵入して、反革命の白軍をも支援していたのであるが（エリ・エヌ・クタコフ，日ソ外交関係史，第1巻，ソビエト外交研究会訳，刀江書院，昭和40年，21～29頁），モンゴルの封建領主は、日本など帝国主義干渉軍と公然と手をむすんだ。

日中共同防敵協定

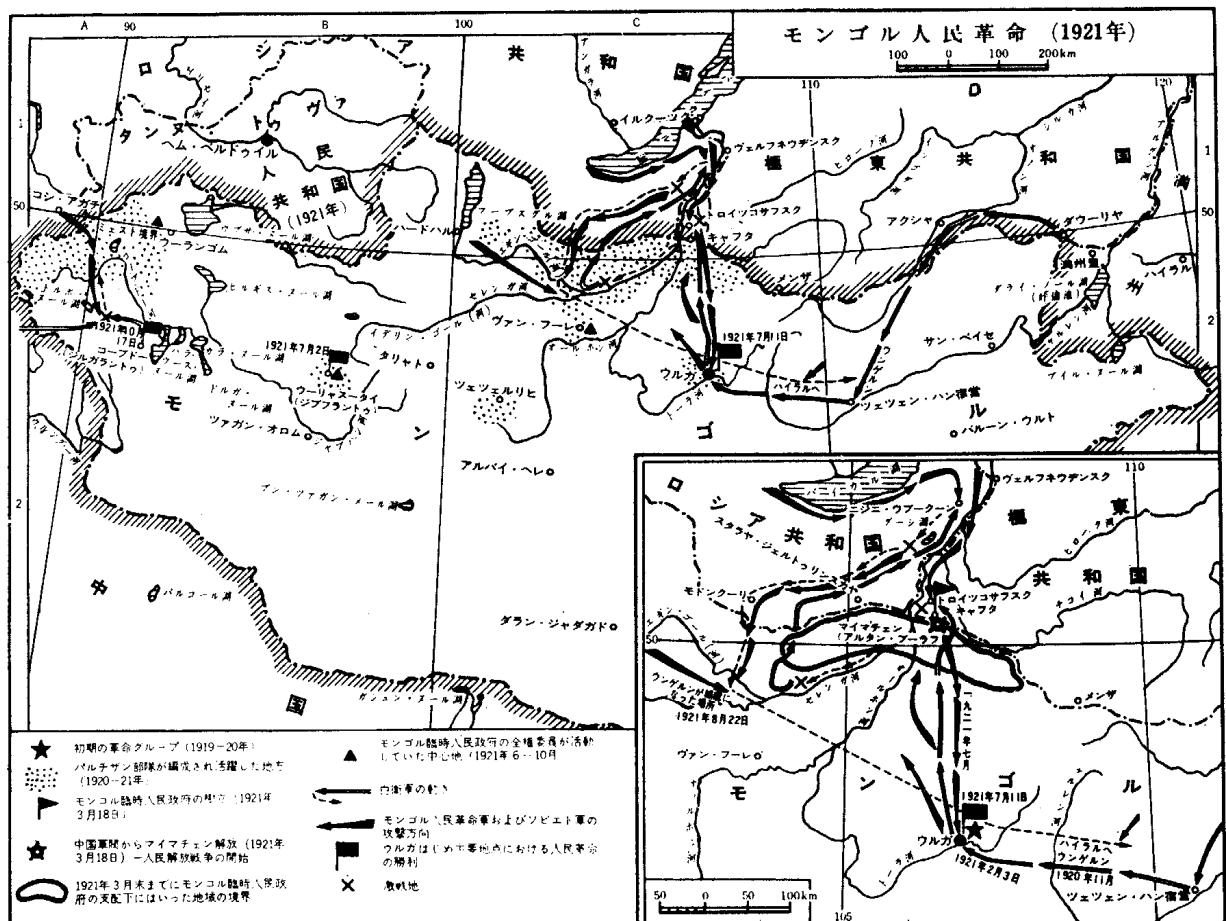
1918年1月末～2月に、「極東露領ニ対スル出兵計画」が日本陸軍によって作成された。ザバイカル州方面では、チタ附近のカザーク部隊，すなわち，セミョーノフを中心とする部隊を援助することとされた。また「支那軍隊ヲ加入セシムル」とも立案された。ザバイカル州に進出するためには，北部満洲と中東鉄道にたいする支配権をあらかじめ確保しておくことが日本軍にとって有利であり，このような状況が日本を「満蒙支配」に一步前進させるよう作用した。セミョーノフにたいする日本の出先機関の工作は活発になり，北京では，北部満洲と中東鉄道にたいする支配権確立にむけた日中軍事協定への圧力も加えられていった（前掲，222～225頁）。

封建的な諸要素が残存している中国も，日本とおなじく，社会主義勢力と両立できない側面があった。日中軍事協定の動きは，すでに1917年の秋からはじまっている。日本の圧力によって，1918年5月17日，**日・支陸軍共同防敵軍事協定**が調印された。この秘密協定は，とりわけ，つぎのように定めている。

第1条 日支両国陸軍ハ敵国勢力ノ日ニ露国境内ニ蔓延シ其結果将ニ極東全局ノ平和及安寧ヲ侵迫スルノ危険アラントスルニ因リ此情勢ニ適応シ且両国カ此次ノ戦争参加ノ義務ヲ実行センカ為共同防敵ノ行動ヲ執ル（杉森康二・藤本和貴夫，日露・日ソ関係，新時代社，1983年，228頁）。

この日中共同防敵協定は，日本軍の北満洲方面への派兵の根拠とされた。沿海州への国際的な「連合出兵」とならんで，北満洲，ザバイカル州への日本だけの「単独出兵」も開始される。南満洲にいた北海道の第7師団の主力は，「居留民保護」ということで満洲里（地図，D・2）付近に派遣されることが決定された。北満洲は，白軍のセミョーノフが当時根拠地としていたところである。かれは，1918年5月にソビエト領内のダウーリア（地図，D・1）に侵入したが，7月には日本人義勇兵をふくむセミョーノフ軍は，ふたたび満洲里に退却した。中国国境守備隊は，ソビエト側にたいして以後セミョーノフ軍に国境を侵犯させないと約束し，セミョーノフ軍にたいしては，その武装解除を求めたが，日本の圧力があって成功しなかった。セミョ

社会主義国化過程とソ連邦の国際関係 (2) (金子利喜男)



世界史, 現代 2 より (ただし D は筆者による付加)

ーノフの軍隊は、日本義勇大隊をふくむ歩兵、騎兵、砲兵からなっていた。8月26日には、北海道の第7師団の藤井支隊が、満洲里に集結をおえるや、セミョーノフ軍は、ふたたびソビエト領内への侵略をはじめめる(前掲, 272~274)。第7師団は、セミョーノフを支援し、シベリア方面にも進出した。9月に藤井師団長は、第12師団と共同して北進し、チチハルから黒河をへて、ブラゴベシチュンスク方面に前進し、ザバイカル、アムール、沿海の3州に進出した(新北海道史, 通説3, 第4巻, 「北海道」編集発行, 昭和48年, 864~865頁)。ここばかりでなく、ロシアのあちらこちらで、列強は対ソ干渉戦をおこなっていたのである。中国軍も、1918年8月から投入され、10月には増強されて、その兵力は2,000名になったともいわれている。中国軍の指揮をとったのは、海軍代将の林健章である(前掲, 日露・日ソ関係, 280頁)。

日本の対モンゴル干渉 アンフー
北京で政権をにぎっていた中国の安福派軍閥

が、日本と秘密協定をむすび、ソビエトにたいし共同行動をとると約束した直後、モンゴルの活仏政府は、中国軍閥の軍隊が首都ウルガ（今日のウランバートル）に進駐することをゆるした。こうして、日本が中国軍閥をつかって、モンゴルに干渉するきっかけができた。最初、日本は、「大モンゴル」を樹立する計画をたて、白衛軍の軍人セミョーノフは、この計画を実現するため、日本から資金と武器とをもらったが、結局、この計画は失敗におわった（前掲、世界史、現代2、551～552頁）。

しかし、今度モンゴルでは、さらに弱肉強食がつづいた。まず最初に、中国がモンゴルをさらに自国に従属させようとした。1919年の夏、ウルガ駐在の中国総督の陳毅^{チェン・イー}は、モンゴルの活仏にたいし外モンゴルの自治を廃止するよう提議し、活仏は、自分や聖俗の封建領主のために特権を与えることを条件にこれを承諾した。しかし自治制度を放棄する政府の意図は、モンゴル国内でひろく不満の波をまきおこした。そこで、活仏は議会を解散したが、内外の情勢は、かれを不安と動揺のなかにおとしいれた。

中国軍閥と日本帝国は、事態を急速に進展させることをきめた。ロシアでは、赤軍がコルチャークにたいし壊滅的な打撃をあたえて成功をおさめたことや、モンゴルに革命運動の兆候が大きくなっていることに不安を感じたからである。日本は、陳毅に活仏と話をつける能力がないと確信するや、公然と圧力をくわえてモンゴルの自治を廃止しようと試みた。1919年11月、日本帝国の影響下にあった徐樹錚^{シュエ・シユー・チヨン}は、陳毅をとらえてモンゴルから追放し、ついに活仏邸を包囲し、自治を放棄するよう最後通牒をつきつけた。

活仏はこれに服し、その後モンゴルの自治の廃止にかんする法令が北京で公布された。ウルガには「中華民国西北寿辺使」がおかれ、徐樹錚は、モンゴル政府を解散し、遊牧民には重税を課した。同時に、かれは日本帝国の依頼に応じて、その軍隊をもって対ソビエト干渉に積極的にのりだし、1920年のはじめには、中国軍閥の武装部隊が、白軍を支援するためソビエトの隣接地帯に侵入した（前掲、552～553頁）。

ソビエトの平和的解決の提案

他方、ソビエト・ロシア内では、ソビエト軍とパルチザンの勢力は強化され、やがて反革命政権は崩壊したので、連合国は、シベリアへ武力干渉を断念して、1920年にはそれぞれ撤退した。ソビエトは、まえにも日本をふくむ列強に平和的解決の提案をおこなっていたのであるが、同年2月24日にも日本外務省に紛争の平和的解決と善隣関係をつぎのむね提案してきた。

ロシアの労農政権を武力で圧殺するすべての試みがむだになり、連合国政府がロシアから自己の遠征部隊を帰還させつつあり、また、いろいろな政府がソビエト政府とすでに交渉を開始した現在、再度われわれは日本政府にたいし平和交渉を開始しようと提案する。ロシア国民は、日本にたいするいかなる侵略的企図をも試みていない。ロシア・ソビエト政府は、日本国民の国内事項に干渉する意図をいささかももっていない。政府は、他の諸国の利益にまさるような日本の特別な経済的利益を極東で完全に承認するであろう。それほどまで政府は、両当事国にとって有益な協定の締結に関心をもっている。ロシア・ソビエト政府は、ソ日間の平和および両国の互惠を確保する暫定協定を定めることを希望する。

ソビエト政府との協定締結によって日本国民の必要を確保しようと求めている日本からの数おおくの声に注目して、ロシア政府は、これらの必要はソ日間の協定によって実際に満足されるであろうと確信する。政府は、日本のシベリア遠征の結果生じた恐るべき事態をかんがみ、また、まさに日本でもっとも有力な政党のなかにシベリア出兵にたいする反対があることもかんがみて、出兵にはすぐにも結末がつけられるであろうことに疑いをもっていない。

人民委員部は、両国民に **平和的共生** (мирное сожительство), **善隣関係** および双方の利益の相互的満足を確保する目的で平和交渉の開始を日本政府に提案する (Документы Внешней Лолитики СССР, Том II, Госудрствснное Издательство Политической Литературы, Москва, 1958, стр. 389. 太字は金子)。

日本は、このソビエト案をも無視したどころか、その後も日本軍は、出兵目的をそういう「過激派」の勢力進出に変更して駐留をつづけ、パルチザンを制圧しようとした。1920年2月以降、ニコラエフスク事件や北樺太占領などあいついでおこったが、このため第7師団は、ふたたびこれらの地域に派遣された (前掲, 新北海道史, 865頁)。

白軍敗走兵のモンゴル侵入

モンゴルでは、さらに弱肉強食が輪番でおこる。1920年の夏には、北京で親日派の安福派がやぶれ、これにかわって親英米派の^{チャーリー}直隸派の軍閥が登場し、これにともなって徐樹錚も権力をうしない、ふたたび陳毅がモンゴルを中国領として確保しておくため、ウルガにやってきた。直隸派との同盟を宣言していた^{チヤオ・ツオリン}張作林は、自分の軍隊を内モンゴルに進入させた。日本は、かれを利用して中国で自国の立場を強化しようとねらっていた（前掲、世界史、現代 2, 570 頁）。同年 10 月、セミョーノフ配下のウンゲルンがモンゴルに侵入したが（アジア現代史 2, 歴史学研究会編、青木書店、1979 年、26 頁）、このとき、中国軍閥はボグドとその当局者の叛逆をおそれて、ボグドを逮捕するよう指示した。当時、ボグドは民衆のあいだに大きな権威をもっていたので、この逮捕は全モンゴル住民を激怒させた（チョイバルサン他著、モンゴル革命史、田中克彦訳、未来社、1971 年、36 頁）。

中国軍は、はやくも同月中にウルガからウンゲルンの白軍部隊を放逐することに成功した。このことを知ったとき、ソビエト政府は、赤軍部隊のモンゴル派遣をひかえることを決定し、中国政府が在モンゴル白軍の根絶のため精力的な措置をとるだろうとの確信を表明し、そのさい、ソビエト政府は、中国当局にたいし、すみやかな軍事援助を提供する用意があることを確認した（Документы Внешней Политики СССР, Том III, Министерство Иностранных Дел СССР, Государственное издательство Политической Литературы, Москва, 1959, стр. 673, примечание 49）。

中国軍が赤軍に援助要請

しかし、他方において、ひきつづきモンゴルは、白軍の敗走兵の逃避場所となり、ウルガはかれらによって占拠された。中国軍閥は、1920 年のはじめには、白軍を支援するため、ソビエトの隣接地帯に侵入していたのであるが、年末に白軍がモンゴル領に侵入するや、ウルガの中国軍は、逆にソビエト赤軍の援助を要請してきた。それに答えて、11 月 11 日、ロシア共和国政府は、つぎのむね中国政府に通知している。

社会主義国化過程とソ連邦の国際関係 (2) (金子利喜男)

セミョーノフの掠奪徒党がこうむった最終的敗北のあと、粉碎された若干の部隊は、中国領に退却しはじめ、おもにモンゴル領にむかい、かれらによってウルガは占拠され、極東共和国（日本とソビエト・ロシアとの正面对決をさけるための緩衝国として、1920年から1922年まで存続した。バイカル、ザバイカル、アムール3州をふくむ—金子）やソビエト・ロシアとおなじく中国にたいしても敵対的な現地の分子と合流した。

ウルガにある中国軍隊は、自己の兵力だけでは、そこで主人顔にふるまっている白軍の徒党を絶滅できず、それゆえ、われわれの統帥部にも、極東共和国の統帥部にも、これらの掠奪徒党とたたかうための援助を要請した。

ソビエト政府は、このモンゴルへの侵入をすみやかに根絶することが、ソ中両国の共通の利益にかなっていると考え、ウルガでの白軍徒党を絶滅するため、中国軍に援助をあたえる用意がある。そのような指令は、シベリアの統帥部にあたえている。

ソビエト政府は、モンゴルに派遣される自己の軍隊が、そこで中国の友人としてそこに入り、モンゴルにいる白軍徒党が根絶されるや、自己の任務が完了したものと考え、ただちに中国領（であるモンゴル—金子）を撤退すると確信する（Там же, стр. 324）。

しかし、中国軍によって、セミョーノフの白軍はウルガから駆逐され、ソビエト政府は、またモンゴルに赤軍を派兵する必要がなくなった。1920年11月28日の中国政府にたいするロシア共和国の通牒で、チチェーリン外務人民委員は、とりわけ、つぎのように述べている。

われわれの知りえない理由によって、われわれは、いままで中国政府から回答を受けとっていないが、中国の軍隊がウルガとその隣接領域からセミョーノフの徒党を駆逐しえたことを確認し、大いに満足している。

このことを考慮して、ロシア共和国政府にとって自己の軍隊をモンゴル領にいれるのをさしひかえることが可能となったことを中国政府に通知する必要があると考える。

なお、もし反革命の徒党がふたたび国境地帯に出現し、われわれの援助が必要となるならば、わが政府がかれらを根絶するため、すみやかな軍事援助をあたえることを言明する（Там же, стр. 346）。

ふたたび反ソ的行動に
ソビエトに敵対したり、援助を求めたりする一貫性のない中国側の態度は、中国が弱体化してい

て、その政情がきわめて不安定であったことに起因している。当時の中国には、統一した軍隊がなく、各地に軍閥が割拠していて、北京政府の権力は、実際には、首都のある直隸（河北）省と他のいくつかにおよぶだけで、それ以外の地域では、他の諸軍閥が支配していた。東北諸省の主人公は張作霖の奉天軍閥であり、かれの背後には日本がひかえていた（参考、前掲、世界史、現代2、561頁）。

中国の反ソ的立場は、とりわけ、1918年の日中共同防敵協定にもすでにあられていたが、モンゴルで白軍分子が根絶され、ソビエトの援助が必要でなくなったとみられるや、ふたたび反ソ・反革命的行動が表面化した。1921年1月の中国にたいするロシア共和国人民委員部の通牒では、とりわけ、つぎのむね述べられている。

ロシア共和国外務委員部は、モンゴルで防備の強化を試みたロシア反革命の徒党を根絶するうえで中国軍が勝ちえた成果に満足していると述べたいとおもう。

しかし、同時に、モンゴルでの中国当局の行為は、おおくのばあい、ロシア共和国の利益をあきらかに侵害する性格をおびていた。昨年末、モンゴルに反革命の部隊が出現するまえに、われわれがうけとった情報によれば、モンゴルで家畜の購入に従事しているツェントロ・サユースの活動にたいし、あらゆる妨害が現地の中国当局によっておこなわれたとのことである。ツェントロ・サユースの勤務員が逮捕されたこともあった。そのさい、モンゴルの中国当局は、ツェントロ・サユースが私人だけでなくソビエト軍にも供給しているということを理由にあげた。

同時に、われわれは、トルキスタンから別の通知をうけとった。これは、中国当局がこの地域に逃がれているロシアの白軍徒党を歓待し、かれらに食糧を供給し、役職にさえつかせたりしていると述べている。また、中国当局がウリクル・ウラスティ川ちかくのロシア領を占拠し、ロシア住民がこの川を灌漑に利用するのをさまたげているとの報知もはいつてきた。

中国国境当局のこのような行動は、あきらかにロシアに敵対的な性格をおびており、中国にとっても、ロシアにとっても、非常に重大な望ましくない結果にいたることもありうる。中国にたいする心からの友情をいだきながらも、われわれは、ロシア国民の利益を乱暴に侵害するこのような行動が将来もつづくことを許容することができず、北京政府が、このような紛争を停止するための必要な措置をとるだろうことを信じている（Там же, стр. 472~474）。

ウンゲルンによるウルガ占領

しかし、ウルガを奪取して、モンゴル領土を対ソ干渉に利用するという任務を日本から託されていたウンゲルンは、ついに陳毅をやぶり、モンゴルの「解放」をスローガンにかかげた。1921年のはじめ、ウンゲルンは、「活仏」の宗教的権威を利用しようとして、ボグド・ゲゲンをウルガから自分の本営にうつした。ボグド・ゲゲンは、ウンゲルンに会うと、かれを援助する用意があると言明した。1921年2月、ウンゲルンはウルガを占領して、そこから中国の軍隊を追いだし、ボグド・ゲゲンを王位に「復位」させた。しかし、ボグド・ゲゲンとその「政府」なるものは、モンゴルの事実上の独裁者ウンゲルンとその背後の日本帝国主義者のあやつり人形であった（前掲，世界史，現代2，553～554頁）。チョイバルサンは、かれの書いた「モンゴル革命簡史」のなかで、つぎのように述べている。

新しく再興した「自治」政府は名ばかりのモンゴル政府であって、実際はパロン・ウンゲルンが実権を握っていた。ウンゲルンの命令は、活仏の勅許を必要としなかった。そのウンゲルン自身は、日本軍部の指図のもとに行動していた。「モンゴル政府」の名をかりて、ウンゲルンは中国大総統（中国北洋軍閥政府総統 徐世昌）、バルガ政府、ソビエト外務人民委員会、日本の手先である中国東三省軍総督張作霖にあてて、モンゴルの自治の回復を宣言した。張作霖には同時に、モンゴルをかれの部隊に任せるという約束を含む秘密の報告を送った。

モンゴルにおけるパロン・ウンゲルンの全活動は、ウリヤスタイ、コブド、ウラーン・ゴムその他モンゴル各地に集結していた白人の徒党を強化し、来るべきソビエト・ロシア攻撃にそなえて軍隊を拡大することを目的としていた。白軍はハルハ諸アイマクの青年を強制的に徴発し、住民から家畜をとりあげた。白軍は裁判も判決もせず、疑わしいと思われるモンゴル人を銃殺、絞殺し、このようなテロによって、人民の中に芽生えるどのような抵抗をも窒息させようと努めた。

国中が白軍のくびきの下でうめき声をあげていた。家畜の豊かなモンゴルは、たちまちのうちに極貧のどん底に落ち、モンゴル人民は餓死におののいていた（前掲，モンゴル革命史，40～41頁）。

2 社会主義革命の展開

革命組織の誕生

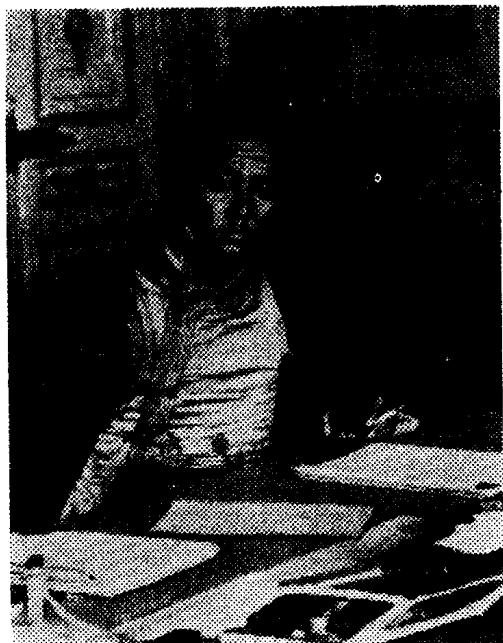
数世紀にわたる漢・満族支配のもとで、モンゴル民族の独立への悲願は、いろいろなかたちをとって、くすぶりつづけてきた。1911年に「自治」を宣言したものの、モンゴルは、事実上は、中国と帝政ロシアの植民地的抑圧のもとにあった。さらに、日本の圧力のもとで、中国軍閥がモンゴルの民族的利益を無視し、日本に支援されたロシア敗走兵までもがモンゴルに侵入してきた。

他方において、隣国ソビエト・ロシアで、社会主義革命軍が圧倒的に優位にたち、ソビエト・ロシアが大きな影響力をもちはじめると、モンゴルでも、社会主義革命の展開しえる余地が生じてきた。最初に、スヘバートルとチョイバルサンの2つの革命的サークルがうまれた。

スヘバートルは、1893年に、まずしい牧民の子として生まれ、貧窮の一家は、ウルガに移住し、そこで生れた妹を養女にだすほど生活は苦しかった。スヘは、14才で駅通運送に従事し、19才のとき活仏政府軍に徴兵され、機関銃隊にはいって、このころ、すぐれた戦略家としての資質がきたえられた。

しかし、1919年、^{ジュイ・シユーチョン}徐樹錚のウルガ占領によって、モンゴルの自治が剝奪され、軍隊も解散されると、かれは一切の生活の場をうばわれ、やむなく妻の実家に帰り、手動式印刷機3台と工員6名の中国系印刷所の植字工となり、この年の暮にボドーらと秘密サークルをつくった。

ふつう「秘密組織」とよばれるこのグループは、ロシアについては、ロシア革命のイデオロギーを理解していたひとたちではなく、中国から自治を回復するため、ロシアを利用しようとするものであった（田中克彦，草原と革命，晶文社，1971年，211，127～129頁）。



モスクワ滞在中のスヘ・バートル・
映画フィルムのひとつ。1921年
（世界史，現代2より）

他方、スヘバートルとは別の場所で、たがいに相手を知ることなく、チョイバルサンは、べつの秘密グループをつくっていた。その主要メンバーは、首都の露蒙印刷所で働くロシア人のクチェレンコや、モンゴルにいるロシア人の労働組合の指導者ゲムバルジェフスキーなどで、すでにロシア社会主義革命の意味をよく理解したひとたちであった。

チョイバルサンは、17才で寺を脱走し、首都の通訳学校に入学し、19才のときイルクーツクにいて、さらに当地で教育をうけることができた。ロシア・ブルジョア革命のとき、かれは、イルクーツクで、労働者の革命的集会を目撃したり、資本主義打倒をよびかけるボルシェビキのスローガンやビラを読んでいたのである。ロシア社会主義革命の勃発後、かれは活仏政府によびもどされたものの、首都の革命的ロシア人と密接な関係にはいっていった(前掲, 129～130頁)。

1919年8月、ソビエト政府は、モンゴル政府と人民にあてて、メッセージを送り、そのなかで、モンゴルの隷属化をねらったロシア帝政との秘密条約をすべて破棄することをつたえ、さらに、モンゴルは自由な国であり、いかなる外国人もモンゴルの内政に干渉する権利はもたない、とソビエトの立場を明らかにした。ボグド・ゲゲン政府は、このメッセージを人民に穏したが、スヘバートルその他の革命家たちは、このことを知り、これをひとびとのなかに広めはじめた(前掲, 世界史, 現代2, 552頁)。

1920年1月、スヘバートル、チョイバルサン両派は、たがいに相手の存在を知り(前掲, 草原と革命, 130頁)、ついに合流して、モンゴル革命家の単一の政治組織が結成された。のちに、これは人民党と称した。革命組織は、ビラをくばり、パルチザン部隊の中核をつくり、武装蜂起の準備をはじめた(前掲, 世界史, 現代2, 554頁)。スヘバートルは、ソビエト政府から援助をとりつけるためキャフタに向ったが、国境を越えることに成功しなかった。しかし革命家たちのある席で、スヘは、もう一度ソビエトと連絡をとってみようではないかと提案した。出国には大きな困難が予期されてはいたが、チョイバルサン他が使節団となった(前掲, モンゴル革命史, 24～29頁)。

臨時人民政府の成立

1920年の夏、モンゴル革命家使節団は、ソビエト・ロシアにむかった。スヘバートルとチョイバルサンをふくむ7名は、国境をこえ、一部は援助要請のためモスクワにむかった。かれらの不在のあいだ、モンゴルでは秘密グループの逮捕、ウンゲルンによるウルガ侵入という緊急事態が発生したので、ダンザンが武器の引きとり交渉のため残留して、スヘバートルとチョイバルサンは、ただちに帰還した。これに先だって、コミンテルンのよびかけに答えて、ジャムツァラーノ教授夫妻らのブリヤート人グループは、人民軍援助の工作にしたがうべく、ただちにモンゴルに潜入した（前掲、草原と革命、130～131頁）。

武器弾薬の調達は、その出発点から難問であったが、かなりの武器が、白衛軍から牧民の手にわたる径路があった。というのは、白衛軍は、みづかりしだい、中国軍に武装解除され没収される運命にあったので、かれらは、むしろすすんで牧民に武器を売って物品と交換するほうをえらんだのである。人民義勇軍に入隊したある兵士は、「白軍の兵から、羊一匹の肉で、70発のたまつきライフル銃を買い、自分の馬に乗って」きたと語っている。赤軍の武器が国境を通過するまでは、白軍からえた手榴弾と連発銃でたたかった（前掲、133～134頁）。募兵は、個々の牧民によびかけられただけでなく、諸侯を通じて集団的にもおこなわれた。ダライハン領主、ナライサム公などが、これに応じた（くわしくは、前掲、134～139頁）。このようにして、初期のたたかいがはじまった。

ところで、1920年11月、モンゴル革命家代表団がロシアから帰国するや、非合法の革命的新聞「モンゴルイン・ウネン」が刊行されはじめ、この新聞は民族解放思想の普及に大きな役割を演じた。1921年3月1日、モンゴル人民党の第1回大会がひらかれ、ここで採択された党綱領には、国内から敵を一掃すること、**人民が国家権力を掌握すること**、あらゆる圧迫を根絶すること、という任務が定められた。大会は、党の中央委員会を選出し、スヘバートルを人民革命軍の司令官に任命し、武装蜂起を準備する機関として**モンゴル臨時人民政府**が組織された（前掲、世界史、現代2、554、556頁）。

ソビエトへの援助要請 その後の革命過程は、急速に展開した。まず、

1921年3月16日にモンゴル人民政府は、つぎのむねの書簡でソビエト・ロシアの援助を求めた。

モンゴル人民が北京政府の反動的当局に我慢できず、武装蜂起をおこなったとき、ウンゲルン白軍は、モンゴル人民大衆の無知と1部のモンゴル諸侯の反逆行為を利用し、外国の抑圧からモンゴルを解放するというスローガンをかけながら、2月にウルガを占領し、そこでモンゴル人民だけでなく、ロシアの平和な住民にたいしても、強奪をおこなった。ウリヤンハイスク地方などの白軍は、モンゴル解放とロシアの名のもとに、醜惡な行為をおこなっている。あらゆるロシア白軍の反革命の徒党は、前代未聞の強制をくわえ、平和な住民から家畜や財産を収奪し、モンゴル人ばかりでなく、ロシアや中国人にたいしても、殺害行為や掠奪をおこない、モンゴルの統治事項に干渉し、モンゴル人民をソビエトに対抗させ、盲従な道具にしようとしている。モンゴル人民政府にとって、中国兵と馬賊徒党とたたかうこととならんで、放埒な白軍徒党を自国から掃蕩しなければならない。

これらの白軍は、モンゴルとロシアの平穩な住民にたいし、等しく有害であることに留意して、モンゴル人民政府は、ロシア白軍の放逸な行為と強奪を根絶し白軍徒党をモンゴルから一掃する強力な措置によって、**すみやかに援助するようロシア共和国に要請する**。モンゴル人民政府は、このよびかけにたいし、實際的な結果がしめされるよう期待している (Документы Внешней Политики СССР, Том IV, Государственное издательство Политической Литературы, Москва, 1960, стр. 780. 太字は金子)。

赤軍のモンゴル出兵 このモンゴルの援助要請にたいし、ソビエトは、

すみやかには反応できなかった。この要請の2日後の1921年3月18日、人民革命軍は、兵力が数倍もまさる中国軍閥の軍隊を撃破して、^{マイマチェン} 売買城を解放し、ここに臨時人民政府の所在地を定めて、全国武装蜂起への第一歩をしるしたが、まだ国土の大部分とウルガは、白軍の支配下にあり、これとの苛烈な闘争がまっていた。臨時人民政府は、4月10日ソビエト政府にたいして、反革命側を撃破する共同闘争をおこなうための軍事援助を正式に要請した (参考、前掲、世界史、現代2, 556頁)。赤軍は、5月にモンゴル領にはいった。他方、1921年6月15日の中国政府にたいするロシア共和国政府の声明では、つぎのむね述べられている。

ソビエト政府は、中国と友好善隣関係を樹立する希望を一度ならず証言しており、中国の諸権利の絶対的遵守を自己の不動の原則であると考えている。ロシアと中国は、たとえば、白軍徒党の頭目であるウンゲルンのような共通の敵をもっている。かれは、自己の権力をモンゴルの心臓部にうちたてた。ロシア軍と極東共和国軍にたいするこれら徒党の攻撃は、不可避的に軍事行動に発展し、ロシア軍が、モンゴル国境を越えて、敵に打撃を加えるのをよぎなくしている。

ウンゲルン徒党との交戦は、中国の諸権利を遵守させるため、まさに中国の利益のためにつづけられており、ロシア共和国は、中国のこれらの諸権利を積極的に擁護している。ロシアと中国の平穏のためには、これらの徒党が根絶されることが必要であり、ロシア軍は、中国の変らぬ友人としてののみ、共通の敵とたたかっている。

ロシア政府は、中国の諸権利の承認に立脚してウンゲルンとたたかい、ロシア軍はその任務が遂行されるやモンゴルから撤兵するということを確言する (Там же, стр. 179~180)。

これにたいし、中国大使館は、1921年6月30日の通牒で、ソビエト政府につきのむね回答した。

ウンゲルンが、モンゴルの非合法分子と共謀して行動し、ウルガを占拠した結果生じた状況をかんがみて、中国政府は、中国の將軍を総監に任じ、すみやかに任地におもむき、蜂起に結末をつけるよう命令している。ウルガ進撃のためには、万端の準備がなされている。中国政府は、まもなく秩序と平和が樹立されるであろうと期待している。中国政府は、赤軍によるモンゴル領通過にかんするソビエトの提案が友好的精神につらぬかれていることをみとめつつも、領土上の諸権利を侵害するような提案に賛成することは困難である。ロシアとモンゴル間の国境の無秩序にかんしては、その慎重のためときおり必要となることのある両国の共同行動について話合う用意がある (Там же, стр. 217)。

しかし、この回答を渡した中国大使館の書記官は、もしソビエト政府が中国領でウンゲルンをとらえ、懷滅させたとしても、とくに中国政府はこれに抗議しないが、しかし、ソビエト政府も、もし中国政府がウンゲルン徒党を粉碎しつつ国境を越えたとしても抗議しないことを希望する、と口頭でのべた (Там же, стр. 217)。このように、ソビエトは、赤軍のモンゴル越境については、中国側から暗黙の了解をとっていた。

ソビエト軍残留の要請

ついに 1921 年 7 月 7 日、モンゴル人民革命軍とソビエト赤軍は、ウルガを白軍から解放し、翌 8 日に臨時人民政府と人民党中央委員会が首都にはいった。11 日、人民革命政府が樹立され、おごそかに革命の勝利が宣言された。しかし、人民革命党の決定により、いぜんとして牧民の信頼をえているボグド・ゲゲンを制限された君主として王位に残し、他方、政府は、ロシア政府にたいし、ソビエト軍残留について、つぎのむね要請した。この要請は、ロシア政府外務人民委員部によって、7 月 12 日に受領された。

モンゴル人民革命政府は、現在東部の平原で防備を強化している共通の敵から脅威が最終的に除去されるまで、**ソビエト軍の部隊がモンゴル領内から撤退しないよう要請する**。人民革命政府がロシア共和国政府にこのような声明をおこなうのは、モンゴル政府がまだ新政権機構の組織化を完了していないからである。ソビエト軍の残留は、モンゴル領とロシア共和国国境における安全保障を維持するため、絶対に必要である。

人民革命臨時政府は、ロシア共和国政府が、共通の敵を根絶する相互的関心と情勢の重大さを考慮して、われわれのよびかけに応ずるであろうとの確信を表明する (Там же, стр. 261. 太字は金子)。

ソビエト政府は、この要請に応じて、1921 年 8 月 10 日の通牒で、とりわけ、つぎのむね回答した。

ソビエト政府は、自国の軍隊がモンゴル臨時政府の革命軍とともに共通の敵ウングゲルンに大打撃をあたえるよう指令した。かれのために、モンゴル人民は前代未聞隷属と暴圧をこうむった。モンゴル領へのソビエト軍の進軍は、共通の敵の壊滅、ソビエト領をおびやかしている絶えざる危険の排除、自治モンゴルの自由な発展と自決をもっぱら目的としている。

ロシア政府は、ソビエト部隊が共通の敵の最終的な崩壊までモンゴル領域から撤退しないようにとの希望を表明しているモンゴル人民革命政府のよびかけをしり、満足している。この希望のなかに、解放されたモンゴル人民とロシアの労働者および農民をむすびつける親密な友情のきずなをみとり、ロシア政府は、事態の重大さおよび共通の敵を根絶するうえでのロシアとモンゴルの相互の関心を十二分に考慮していることを表明する。

モンゴル人民の自由な発展とロシア共和国の安全保障への脅威が排除されるや、

モンゴルからソビエト軍を撤退させることをかたく決意しつつも、ロシア政府は、モンゴル革命政府と完全に一致して、この時期がまだ到来していないことを確認する (Там же, стр. 259~260)。

革命軍の勝利

モンゴル革命軍とソビエト赤軍によって、ウルガが白軍から解放されたとはいえ、西部には、まだカイゴロドフ、バチキ、ソコリニツキー、カザンツェフらの白軍が優勢をたもっていた。1921年のなかごろは、革命側の辺境政府軍は、わずか500名の兵力であるのにたいし、白軍は6,000以上であったともいう。しかし、ウルガ解放後の7月16日、マルサルジャブは、友軍ワンダノフらの白軍部隊を潰滅させ、西部における人民軍の脅威となっていた強敵を除去し、以後ソビエト赤軍に合流して白軍の掃滅につとめる決意をした。

8月2日、革命側は、西部の住民に徹底的な抗戦をよびかけたが、翌9月になると、その西部革命権力は、最大の危機にさらされた。白軍統一部隊が、辺境の革命軍を破ったからである。人民軍と赤軍は、トルボ・ヌール湖畔 (前掲地図, A・2) のサルトール・グン廟にたてこもり、赤軍の救出を待ちながら、42日間この陣地を守った。ついに援軍が到着し、白軍の包囲を打破した。これまでの過程で、西部の反中国的な民族主義者も、しだいに人民政府に合流して白軍を一掃し、その重要なポストまで占めるようになった。このようにして、ロシアからの白軍の敗走兵が、モンゴルでも撃破され、モンゴル人民革命軍とソビエト赤軍の勝利が不動のものとなったのである (前掲, 草原と革命, 139~143頁)。

日米の失敗

モンゴル人民にたいする中国の抑圧だけでなく、反動的な日米の対モンゴル政策も崩壊した。1921年9月3日イルクーツクから外務人民委員チチェーリンにあてたシュミャツキーの電文は、日本と反革命の連携、それにソビエトの内側の雰囲気をしめすものとして興味ぶかい。この電文は、つぎのむね述べている。

ウンゲルンを捕虜としたことは、モンゴル側からわれわれを包囲し極東共和国からわれわれをひきさこうとする日本の計画の完全な失敗を意味する。浮浪の残党と

化した7千の騎兵隊をうちやぶることに成功し、北部の中国軍閥、日本の手先、そしてもっとも重要なことに、まさに日本とウングエルンとの関係を粉碎したのである。

ここにウングエルンの文書がある。「本年5月21日、わたしは、日本の支援のもとにボルシェヴィキ（レーニンのひきいる共産主義政党—金子）にたいする攻撃運動をとる」。ウングエルンの崩壊、これは帝国主義の決壊であり、日本との関係におけるわれわれの地位の強化である (Там же, стр. 305~306)。

米国の態度の1端は、チチェーリンあてシュマイツキーの電文で知ることができる。1921年9月22日の電文は、とりわけ、つぎのむね述べている。

ウルガに到着した米国領事は、モンゴル革命政府を孤立させる目的と、われわれの影響力を排除する目的で、諸侯とラマ僧を団結させるべく1カ月以上も試みた。かれは、経済援助を約束しつつ、モンゴル中国間の調停を米国にまかせるよう強請した (Там же, стр. 370~371)。

中国、日本、米国、ロシア白軍などの反
ソビエト・モンゴル友好条約 動勢力は、モンゴルに社会主義的な政権が

樹立されるのをふせぐため、いろいろ試みてきたが、しかし革命の本流にさからうことができず、さらにモンゴルは、社会主義的な方向にむかって、ついに1921年11月5日ソビエト・ロシアと友好条約をむすんで、両国の密接な関係をふかめていった。この条約は、とりわけ、つぎのむね定めている。

帝政ロシア政府とモンゴル自治政府間で、ロシア政府の強奪的政策によって締結された諸条約が、両国で生じた新たな情況の結果、その効力を失ったことにかんがみ、モンゴル人民政府およびソビエト政府は、両国国民間の自由な連合および協力への心からの渴望によって動かされ、このため交渉に入ることを決意し、両国全権代表は、つぎのように協定した。

第1条 ソビエト政府は、モンゴル人民政府をモンゴルの唯一の合法政府として承認する。

第2条 モンゴル人民政府は、ソビエト政府をロシアの唯一の合法政府として承認する。

第3条 両締約国は、自国領で他方の締約国にたいする闘争を目的とする政府、団体、グループなどの組織を認めず、また締約国と闘争している団体に属する武器の搬入および通過を禁止する。



ウルガの10月社会主義大革命記念式典に参加した人民革命軍兵士：写真・1902年（前述「世界史，現代2」より）

第4条 ソビエト政府は，その全権代表と領事をモンゴルに派遣する。

第5条 モンゴル人民政府は，その全権代表と領事をソビエト共和国に派遣する。

第6条 両国の国境は，特別委員会によって確定される。

第7条 各締約国の市民は，最恵国国民待遇を享有する（Там же, стр. 476～478）。

こうして，ソビエト・ロシアは，モンゴル革命政権を強力に支援し，その地位を高めて，友好的な政治経済関係の基礎をすえた。

モンゴル革命の勝因は，第1に，この革命にさきだってすでに社会主義国ロシアが存在していたことである。もしロシア革命が成功していなかったと仮定すれば，モンゴルの共産化も成功していなかったであろう。むしろ近隣諸国の半植民地あるいは植民地になっていたかもしれない。仮定問題はともかく，現実においては，ソビエト・ロシア革命の成功とその社会主義国家の存在，およびその地政学的要因が，前述したように大きな影響力をあたえている。ロシア革命が内発的なものであったとすれば，モンゴル革命は外発的な要素を多分にもっているともいえる。しかし，同時に，モンゴル革命も内発的諸要素をもっていることを忘れてはならない。その封建的な社会経済制度，半植民地的地位，人民党の活動などは革命の内発的要因として作用した。

3 モンゴルの独立過程

ソビエトへの調停打診 1911年の中国の辛亥革命のとき、モンゴルは、中国から「自治」を勝ちえたが、モンゴルは、中国と帝政ロシアの協定により、中国の一部を構成する「外モンゴル自治国」として承認された。ロシア社会主義革命後、日本の圧力下にあった中国は、1919年モンゴルの自治を廃止したが、1921年に中国軍はウルガからウンゲルン白軍により追いだされ、売買城の中国軍は、革命軍により撃破された。ついに白軍の残党も革命軍により一掃された。

しかし、まだ根本的な問題が解決されていなかった。すなわち、モンゴルが、国際法上の完全な主権独立国となるかどうかである。モンゴル自身、その完全独立を宣言したものでもなかったし、ソビエトは中国の主権を尊重していた。中国軍が革命軍によって撃破されたとはいえ、中国はモンゴル支配を放棄したものでもなかった。問題は、社会主義的な方向に向かっているモンゴルが、封建的諸要素が残存している異質の中国の構成部分として、両立しえるか、また、どれだけ長くとどまりうるか、である。そこで、モンゴルのボドー氏は、1921年9月10日の通牒で、ソビエトの外務人民委員チチェーリンに、つぎのむね照会した。

ロシアとモンゴル人民の共通の敵であるウンゲルンの白軍徒党とたたかい、そこで流した血のきずなによって親密にむすびつけられているモンゴル人民政府は、ソビエト・ロシアがわが国の領土から敵を一掃し、それによって平和の樹立と国境地帯の両国民の友情をうみだした事実を考慮して、わが国政府は、ソビエト・ロシアの人民委員である貴下が国際的相互関係を調整するうえで仲介をとるよう要請することを私にまかせた。

われわれモンゴル人民が、自己の独立のための英雄的たたかいによって、自立的政治的存立の権利があることを証明したのにもかかわらず、モンゴルと中国のあいだに平和的、実務的相互関係を設定する問題は、残念にも、解明されていない。そのため、おなじ程度に、モンゴル、中国、ロシア人民が関心をもっているわが国内の正常な生活、および国際交易が、確立されていない。

中国は、モンゴル人民と領土について貴下がいかなる侵略的意図をもっていないということを確信しているので、調停にかんする貴下の権威ある発言と提案を拝

聴するであろうと思う。貴下からのすみやかな回答を期待している (Там же, стр. 332~333)。

これにたいし、1921年9月14日の通牒で、外務人民委員チチェーリンは、とりわけ、つぎのむねモンゴル革命政府に回答した。

ロシア政府は、ロシアの勤労大衆とロシア政府への友情、そして9月10日付のボドー氏の通牒で表明されたロシア政府への信頼にたいし、感謝する。モンゴル人民革命政府は、モンゴル人民の自決権を実現すると同時に、モンゴルと中国との平和的、実務的相互関係を設定する必要を確信しており、ロシア政府も完全にその確信を分かちあうものである。ロシア政府は、この方向の措置がよい成果を達成するよう希望している。すでに何回となく、ロシア政府は、中国政府にたいし、この問題について交渉を開始しようと提案した。ロシア政府は、北京に派遣される通商代表団をとおして、中国政府と恒常的な交渉にはいることを考えている (Там же, стр. 332)。

1921年10月に中国は、ソビエト通商代表団の派遣に同意し、パイケスを団長とするソビエト代表団は12月に北京に着いた。ところが、中ソ関係の正常化を妨害しようとして、帝国主義列強、とりわけ米国が北京政府に圧力をくわえた (Документы Внешней Политики СССР, Том V, Государственное Издательство Политической Литературы, Москва, 1961, стр. 719)。

白軍残党の出没と

ソビエト軍の残留

1922年になっても、モンゴル、それに隣接するロシア共和国と極東共和国の安全にたいする白軍敗走兵からの脅威が、完全には排除されていなかった。かれらは、まだ満洲に根拠地をもって、中国の地方当局の庇護をうけていたのである (Там же, стр. 719)。

ソビエト軍は、モンゴル革命政府の要請にもとづいて、ひきつづきモンゴル領に駐留していたが、2月2日、中国側は、このなりゆきを懸念し、ソビエト赤軍に侵略的意図がなく、赤軍をモンゴルから撤退させる用意があるとのソビエト側の発言を書面の形式にしてほしいと要望した (Там же, стр. 86)。パイケスは、これに応じて、中国側の代表者に、7日付の通牒で、つぎのむね述べている。



干涉軍との戦闘に参加したモンゴルのパルチザン・グループ：写真。1922年（世界史，現代2より）

貴下との会談で、私は一度ならずソビエト・ロシアが中国人民にいただいている友情を強調してきた。いまこのおりに、2月2日の貴下の書簡に答えて、ふたたび表明したいのは、ソビエト政府はモンゴルでいかなる侵略的意図をももたず、かつ北京政府がモンゴル人民革命政府と話しあって相互関係を調整することを非常な忍耐をもって待っているということである。ソビエト軍は、モンゴル政府の要請にもとづいて、白軍徒党を根絶し秩序を維持するため、モンゴルに駐留しているのである（Там же, стр. 86）。

1922年の夏には、北京でのソビエト代表として、A. A. ヨッフエが任命された。10月14日、在中国ロシア共和国代表は、いずれソビエト軍の撤退すべきときが到来するであろうとの覚書を中国外務省に送った。これは、とりわけ、つぎのむね述べている。

東トルキスタンの住民が、ソビエト軍の当地での残留を要請したにもかかわらず、ソビエト労農政府は、東トルキスタン方面から白軍徒党の脅威がなくなるや、自己の軍隊をそこから撤退させた。まさにこのようなことが、やはりモンゴルの住民がロシア軍の残留を要請するにもかかわらず、モンゴルとの関係でも生ずるであ

ろうが、残念ながら、まだそのときは到来していない。中東鉄道（Китайская — Восточная железная дорога）の完全な破壊、その悪用は、情勢を複雑化し、モンゴル方面からロシアと極東共和国が攻撃される危険性は、除去されないばかりか、最近いちじるしくつよまった。

もろもろの白軍組織は、北満洲方面から極東共和国を部分的に攻撃することによって、こちらに赤軍の兵力と注意をひき、そしてモンゴル方面から大攻撃をロシアにくわえるという計画を作成した。この計画は、すでに実行され、北満洲は、攻撃基地として利用されている。

非常に悲しむべきことに、北満洲の中国当局側から、白軍にたいする妨害がなされていないばかりか、ロシア国民に攻撃をくわえる白軍徒党に援助さえおこなっている。中国当局が、北満洲で白軍徒党を放任していることを証明するもろもろの報告がある。……[一連の事件を省略]……1921年7月には、中国軍によってさえ、ロシアの主権的権利が侵害されたばあいもあった。このときは、300名の中国兵が、ロシア側からの警告にもかかわらず、汽船でアムール河を下った。現在白軍の組織は、中国のいろいろな区域から、北満洲とウラジオストークに白軍部隊を送りこんでいる。

日本の新聞でさえ、まったく公然と白軍の將軍と中国の元帥間のロシアにたいするたたかいにおける相互援助協定について報道した（Там же, стр. 720~721）。

中ソ関係の正常化とモンゴル

ソビエト政府は、1919年7月、「カラハン宣言」を発し、帝政ロシアの旧条約の破棄、義和団事件賠償金の放棄、領事裁判権や他の一切の特権の廃止を宣言し、翌1920年には第2次カラハン宣言を発した。これは、まったく中国に有利な前代未聞の宣言ではあったが、北京政府は、その真意を疑い、列強の干渉もあって、具体的交渉に入らず、一方的にロシア利権の回収につとめた（田中直吉、世界外交史、有信堂、1976年、9刷、187頁）。

しかしながら、中国が、ソビエトとおなじく、帝国主義列強から民族的な利益を無視されてきたという側面では共通項をもっており、ソビエト政府は、その側面を強調して、ついに1923年には中ソ関係の正常化の動きがあらわれてきた（Документы Внешней Политики СССР, Том VI, Государственное Издательство Политический Литературы, Москва, 1962 г. 66, 121, 250, 254, 257, 275, 305, 310 [Пифры Указывают номера документов]）。

翌1924年に、諸問題調整のための基本原則にかんする協定がむすばれた。これは、モンゴルについて、つぎのように定めている。

第5条

ソビエト社会主義共和国連邦は、外モンゴルが中国共和国の構成部分であり、そこでの中国の主権を尊重することを承認する。

ソビエト社会主義共和国連邦は、外モンゴルからソビエト社会主義共和国連邦のすべての軍隊を帰還させる諸問題、すなわち、これら軍隊の帰還の期限、および国境の安全のためにとられるべき措置にかんする諸問題が、本協定第2条で指定されている会議で合意されるや、外モンゴルからソビエト社会主義共和国連邦のすべての軍隊を完全に帰還させることを言明する (Документы Внешней Политики СССР, Том VII, Государственное Издательство Политической Литературы, Москва, 1963, стр. 333)。

前述5月の協定が調印され、ボグド・ゲゲンが死ぬと、モンゴルでは、1924年11月26日に、モンゴル人民共和国が正式に宣言され、ソ連は、翌年にその軍隊を撤退させた。

完全主権国家への道 しかしながら、完全な独立への道は、第2次世界大戦を通らなければならなかった。まず1945年の米英ソのヤルタ協定で、「外蒙古(蒙古人民共和国)の現状は維持する」とされ、1945年8月14日には、中ソ条約の調印と同時に、モンゴル人民共和国独立にかんする公文が両国のあいだで交換され、中国側の公文は、つぎのむね述べている。

外モンゴルの人民によって、一度ならず表明された独立の志向をかんがみ、中国政府は、日本の敗北後、もし外モンゴルの人民投票がこの志向を確認するなら、モンゴルの現存国境内で、外モンゴルの独立を承認することを声明する (Там же, стр. 708)。

ソビエト政府も、その公文で、「モンゴル人民共和国の独立および領土保全を尊重すること」を声明した (Там же, стр. 710)。1945年10月20日、モンゴルで人民投票がおこなわれ、**投票参加者の100%がモンゴル独立に賛成投票した**。中国は、モンゴルの独立を承認し、その結果、翌年、中国とモンゴルの外相のあいだで、両国の外交関係樹立にかんする公文が交換された。1949年に中華人民共和国が成立したとき、モンゴル人民共和国政府は、

中国の共産政権を承認し、蔣介石政権との外交関係を断絶した。1950年2月14日、中ソ友好・同盟・相互援助条約が調印されたさい、中ソ両社会主義国は、その交換公文で、つぎのようにモンゴルの独立を確認した。

両締約国は、モンゴル人民共和国の独立の地位が、1945年外モンゴルでおこなわれモンゴル独立の志向を確認した人民投票の結果、および、中華人民共和国とモンゴル人民共和国との外交関係樹立の結果、すでに完全に確保されていることを確認する (Там же, стр. 710)。

1961年10月、モンゴル人民共和国は、国際連会の総会で、国連加盟が承認され、さらに、その国際的地位をたかめていった。

※ ※ ※ ※ ※

ウランバートルの広場の中心に立つスヘバートルの像に刻まれているかれの言葉：

わがくにびと、思いをひとつに、力をあわせば……
たどりつけぬ地はなく、知らざる、能わざること
ひとつとしてなし (1923年)

はてしなき草原で生活していたモンゴルの遊牧民にとっては、「たどりつけぬ地」の広大な空間は日常的であったのかも知れない。遊牧民たちにとって、ふるさととは何であっただろうか。ともかく、モンゴルの子供たちが学校に入って、まずおぼえるのは、つぎの「我がふるさと」の歌である。

ヘンティ、ハンガイ、ソンの高く美しき峰々……
広く大いなる荒野原
南のかたをさき守る砂丘の海原
これぞわが生れしふるさと
モンゴルの美しきくに